

“中山科学振興財団の 20 年をふり返って”

中山科学振興財団 理事長 小林 登



小林でございます。中山科学振興財団の 20 周年を記念いたしまして、この 20 年間に起こったことを、また私なりに考えていることを述べさせていただきます。

中山科学振興財団

Nakayama Foundation for Human Science

設立 1991 年（平成三年）12 月

初代理事長 中山 三郎平

二代理事長 小林 登（1996～）

中山書店設立 1948 年（昭和 23 年）

スライド 1 中山科学振興財団の設立

スライド 1 にありますように、中山科学振興財団は中山書店設立の社長であった中山三郎平さんが、かねてより準備・推進し 1991 年の 12 月に文部省から認可が下りて、設立が決まりました。私はその後、5 年ほどたって 2 代目の理事長を引き受けた次第でございます。これをご覧になると、中山科学振興財団、英語名はヒューマンサイエンスになっています。これは中山人間科学振興財団として文部省に申請したところ、その担当官が、受付の若い人だったと私は想像しますが、人間の科学はないと言うのですね。だから、その当時は人間の科学という言葉は使われていなかった。学術会議も使っていなかったということになるのではないかと思います。それがここから“人間科学”をとって日本語の名前は科学振興財団にして、英語のほうだけヒューマンサイエンスをつけたわけであります。この財団をつくられた中山三郎平さんという方は、1948 年（昭和 23 年）に中山書店を設立されました。ですから、戦後の混乱の中で立てられた出版社でございます。



スライド 2 創業者 中山三郎平氏

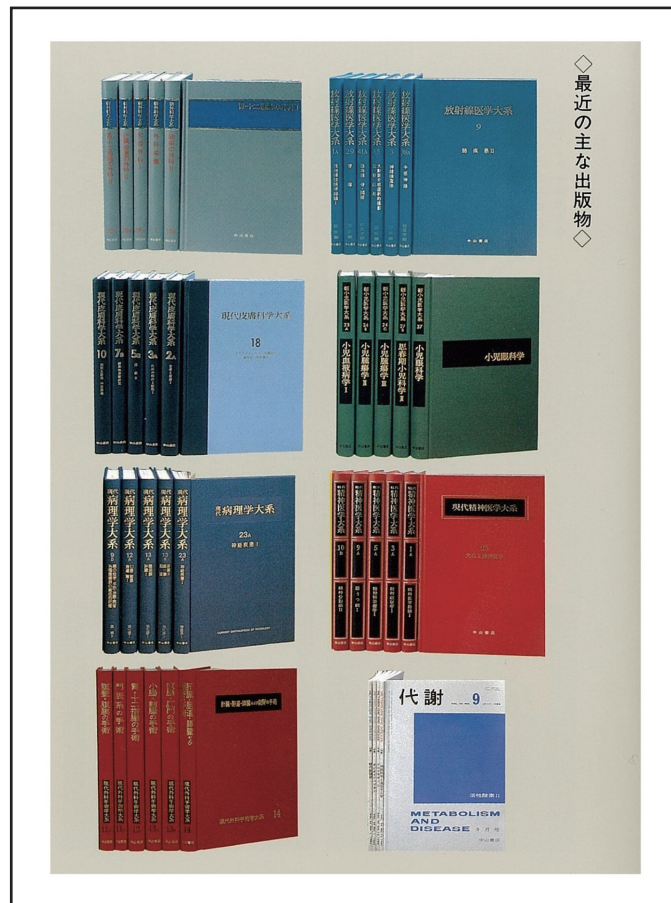
スライド 2 は中山三郎平さんが銀杯を天皇陛下からいただいたときのお祝い会の時の写真でございます。岩波書店で勉強されて、そして戦前一期小さな本屋さんを作られたということを伺っております。そして戦後、戦災で全く焼け野原の中で時代の新しい動きを考えられて、中山書店を設立され、中山科学振興財団もつくられたと私は考えております。

私とのご縁は、実は私の恩師の高津忠夫教授が、中山三郎平さんと一緒になりまして《現代小児科学大系》（全 18 巻 25 冊：1965～1976）というのをつくられたわけです。高津先生の後を私は継いだものですから、新しい大系をつくるようにということで、私が 70 年に東大の小児科の教授になったときに高津先生と九大の遠城寺宗徳先生と中山三郎平さんと私と 4 人で食事をする機会をいただきました。そのときに恩師はいうまでもなく、遠城寺先生からも立派な本をつくるようにということで、私がお話を受けたわけでありまして。《新小児医学大系》（全 41 巻 90 冊：1979～1992）という名前にしました。ちょうど小児科学が専門分化をする時代だったものですから、それぞれの部門が長いものでは 4 冊くらいあったと思いますが、例えば小児神経学という部門は 4 冊くらいの本になったと思います。全部で 41 巻 90 冊の本をつくりました。その後、年刊版をつくって、計 100 冊という大部なものになりました。私としては専門の小児科学の本で、このような大作をつくられたというのは私の人生にとって、最も楽しいこととございました。残念なことに中山三郎平氏は、1995 年の 5 月 28 日、つまりきょう亡くなられたわけで、その命日にちょうどこのようなお祝いの会をする機会ができたのも、何かの因縁ではないかと私自身も感銘深いものがあります。九州大学の遠城寺先生と高津先生と一緒に食事したときの中山三郎平さんというのは、いつも静かに座っている方で、何もおっしゃらなかったのですが、今もその姿が思い出されます。

中山書店、中山三郎平氏が 出版を介して目指し、 中山科学振興財団に願ったもの

スライド 3 中山科学振興財団への願い

中山三郎平さんが中山書店をつくって、出版を介して何を考えていたか、そして中山科学振興財団に何を願ったかということをし少し考えてみたいと思います。私の伺ったことでございますが、中山三郎平氏は社会科学の本を出したかったのだと伺っておりますが、同じ岩波で勉強された青木さんが青木書店をつくられたので、それがかなわないというので医学・生物学の本を出そうとお考えになったと言われております。



スライド 4 主要な大系書

スライド 4 をごらん下さい。《現代皮膚科学大系》(左側上から 2 段目)、その右側に《新小児医学大系》で、私のつくった本です。その多くはいわゆるシリーズものですね。ちょうど私が理事長を引き受けたころまでに大系とか講座というのは、60 分野以上つくっておられます。そして単行本も 50 タイトル以上出ております。それがほとんどが医学・生物学系の本であると同時に、人間の科学的な本を、人間の科学、ヒューマンサイエンスという名前でもいいような本をつくられていたわけです。大系、講座ですから 60 分野という最低 1 シリーズを 3 冊としても、多いものは 10 冊ということがあるわけですから、数百冊の本をつくられたわけです。その中で 8 回、9 点、毎日出版文化賞を受賞しておられます。

毎日出版文化賞

1952年	生理学講座	(12巻、18冊)
1953年	生物学大系	(8巻)
1954年	心理学講座	(12巻、16冊)
	農業図説大系	(5巻)
1956年	人間の科学	(6巻)
1957年	生命の科学	(6巻)
1985年	ヒューマンサイエンス	(5巻)
1986年	現代生物学大系	(14巻、19冊)
1999年	動物系統分類学	(10巻、24冊)

スライド5 毎日出版文化賞受賞図書の一覧

スライド5にありますように、1952年に《生理学講座》、1953年に《生物学大系》、1954年に《心理学講座》と《農業図説大系》。この年は2つです。1954年は私が大学を卒業した年です。それから1956年に《人間の科学》、1957年に《生命の科学》、1985年に《ヒューマンサイエンス》、これは村上陽一郎先生、石井威望先生、清水博先生と私が一緒になって5冊つくっております。その後1986年に《現代生物学大系》、さらに1999年に、《動物系統分類学》で毎日出版文化賞をいただいているわけです。



スライド6 毎日出版文化賞受賞図書の表紙（一部）

スライド6に毎日出版文化賞をいただいた本の表紙の一部をとりあげてみました。《心理学講座》がありますし、《人間の科学》ではこのところに人間の心理とか、《現代生物学大系》等々、ここに出ているような本が出されたわけです。



スライド 7 毎日出版文化賞のトロフィーとメダル

スライド 7 は、毎日出版文化賞の賞状であり、トロフィーとメダルです。私は中山三郎平氏は、次のようなことを（スライド 8）考えていたのではないかと思います。

人間を対象とする新しい科学の流れ

- ・学際的、包括的
- ・Transdisciplinary, Holonic
- ・自然科学、人文科学を融合して
- ・医学を取り込み、乗り越えて

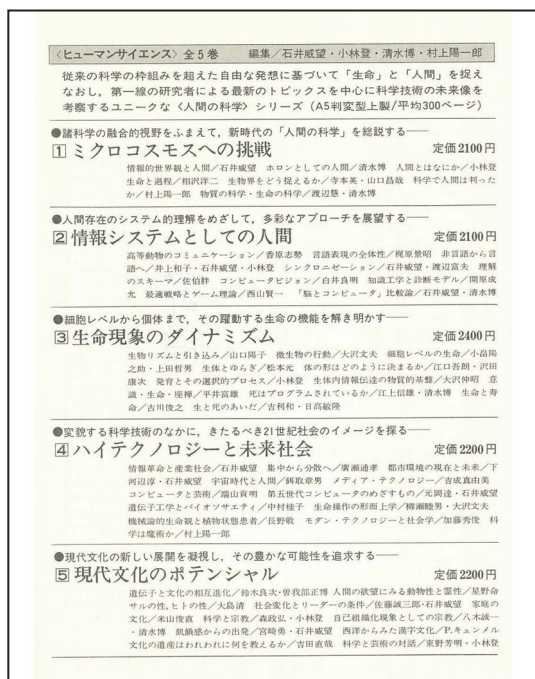
スライド 8 人間を対象とした新しい科学の流れ

つまり人間を対象とする新しい科学の流れをつくりたかったということ、あの戦後の荒廃の中で考えて、そしていろいろな人間に関する学問を結びつける。そして包括的に統合する。ハイカラな言葉を使えば、transdisciplinary と。あるいは holonic ホロン（ホロンという言葉がアーサー・ケストラーの本に書いてありますが、“全体子”と訳しています）の粒子が全体的であると同時に分析的であるという意味です。そのような考え方は、現在学術会議も自然科学と人文科学を融合して、文理融合科学という言葉を使っています。そういう意味で考えますと、私は医学を取り込み、乗り越えて人間の本質を理解するような科学を体系づけたいということをお考えになっていたに違いないと、思っているわけであります。



スライド 9 人間の科学と生命の科学の概要

「人間の科学」とか「生命の科学」といえば、大変学際性の強い科学であります。注目すべきは、「人間の科学」の編集には、ノーベル賞をもらった物理学者の湯川秀樹先生も入っているのですね。もちろん物理学のなかには、生命をどうとらえるかという考えは、シュレージンガー以来いろいろな考え方がありますが、当然と言えば当然ですが、そういう学際的と言いますか、いろいろな学問を融合するという発想が私はあったと思うわけです。生命の科学も同じですね（スライド 9）。



スライド 10 《ヒューマンサイエンス》(全5巻)の概要とその全体図

ここにありますが、《ヒューマンサイエンス》(全5巻)は、我々が考えた新しい人間の科学ということになる本であります（スライド 10）。

毎日出版文化賞 8回受賞

(1952, 53, 54, 56, 57, 85, 86, 99)

ヒューマンサイエンス	1985
生命の科学	1957
人間の科学	1956

スライド 11 毎日出版文化賞の受賞履歴

ここに書いてありますように、《ヒューマンサイエンス》が1985年、《生命の科学》が1957年、《人間の科学》が1956年というふうに3点、毎日出版文化賞を頂いておられます（スライド 11）。私、中山書店から出ている本を見て、《現代文化人類学》というのが、全5冊で出ているのですが、これがどうして賞の対象にならなかったか、ちょっと疑問に思っているところでもあります。

J.Z. Young : An Introduction to the
Study of Man, Clarendon Press,
Oxford, 1971
武見太郎監訳, 「比較人間論」,
広川書店, 1976

スライド 12 Young の本

J.Z. Young という人が An Introduction to the Study of Man という本を Oxford で 1971 年に出しています。これは私は新しい意味での人間科学の走りではないかと思いますが、71年にこの本が出る前に中山書店では、もう立派に“人間の科学”という本が出ているというところに、私は非常に強い感銘を受けております（スライド 12）。Young は脳科学者ですが、ロンドンのユニバーシティカレッジで医学部の学生に人間科学として講義をしております。いわゆる基礎医学系の講義を学際的にまとめた講義ですが、それこそ文化人類学も含まれ、それから化石人類学も含まれ、人間を包括的に理解するという意味で書いております。この Young は、人間に関わる人は人間を科学的に理解する視点が重要であると。例えば医者はもちろんのこと、弁護士さんもそうだし、行政官もそうだし、教育者もそうだと。そういう意味で人間を包括的に考えるような新しい科学的な視点でものを考えるようにしなければならないということを述べております。しかし、この Young の 71 年から比べれば、中山三郎平氏の視点の早さというか、大変深い考え方の中で本をつくってこられたことが理解できるのではないかと思います。

中山科学振興財団が
「人間の科学」のために
この20年間にわたって
行って来たもの。

スライド 13 財団の 20 年間の活動

さて、中山科学振興財団が“人間の科学”振興のためにこの 20 年間に行って来たこと（スライド 13）を少しご紹介したいと思います。

20 年間いろいろあったわけですが、その間の 16 年を考えると、毎年理事会並びに皆で話し合っ、テーマを決めて、褒賞か研究助成、そして直接そのテーマとは関係ないテーマであっても、海外渡航助成と外国研究者の受け入れの助成という事業をやってきたわけです。

歴代公募テーマ一覧 (1)

平成 4(1992)年度/第1回	コミュニケーションの生物学的研究
平成 5(1993)年度/第2回	文化と遺伝
平成 6(1994)年度/第3回	ヒューマン・インタフェース
平成 7(1995)年度/第4回	リズムとゆらぎ
平成 8(1996)年度/第5回	類人猿にみる人間
平成 9(1997)年度/第6回	疲労と摩耗
平成10(1998)年度/第7回	脳機能の画像
平成11(1999)年度/第8回	動物の系統と分類
平成12(2000)年度/第9回	21世紀のメディアエコロジー
平成13(2001)年度/第10回	セルフの人間科学

スライド 14 歴代公募テーマの一覧 (その 1)

歴代の公募テーマをスライド 14 に示します。第 1 回は「コミュニケーションの生物学的研究」、これは岩田誠先生が中山賞の受賞者になっておられます。それから第 2 回の「文化と遺伝」、これはあのころちょうどドーキンスが「セルフフィッシュジーン (Selfish Gene)」という本を出したものですから、ドーキンスに賞を出したのですね。ドーキンスは喜んで来たとは思っておりますが、その後 1997 年に第 5 回花の万博記念「コスモス国際賞」を受賞(財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会)されました。それから「類人猿にみる人間」、これは伊谷純一郎先生ですね。それから「セルフの人間科学」、これは清水博先生がいただきました。

歴代公募テーマ一覧 (2)

平成14(2002)年度/第11回	胎児・新生児のヒューマンサイエンス
平成15(2003)年度/第12回	手と指
平成16(2004)年度/第13回	学びと遊び -人間から機械まで-
平成17(2005)年度/第14回	脳と身体性の人間科学
平成18(2006)年度/第15回	自然災害のヒューマンサイエンス
平成19(2007)年度/第16回	エピジェネティクス
平成20(2008)年度/第17回	情動の科学
平成21(2009)年度/第18回	言語の生物科学
平成22(2010)年度/第19回	森林の人間科学
平成23(2011)年度/第20回	睡眠の生物科学

スライド 15 歴代公募テーマの一覧 (その 2)

引き続きスライド 15 のように、11 回が「胎児・新生児のヒューマンサイエンス」というので、九大の中野仁雄先生。「手と指」とか「学びと遊び」、「自然災害のヒューマンサイエンス」というのもあります。「情動の科学」、「言語の生物科学」、「森林の人間科学」、そして最新の第 20 回はミシェル・ジヴェベ(仏)氏が「睡眠の生物科学」で中山賞を受賞されました。

	テーマ	賞	受賞者名	所属	職名	応募テーマ(研究課題)
第1回 1992	「コミュニケーションの 生物学的研究」	大賞	岩田 誠	東大・医(神経内科学)	助教授	読み書きの神経機構に関する神経心理学的研究
		奨励賞	正高 信男	東大・理(人類学)	助手	ヒトの言語発達とニホンザルの音声発達の比較研究
第2回 1993	「文化と遺伝」	大賞	Richard Dawkins	Oxford Univ.		「利己的な遺伝子」、「延長された表現型」 「ワグネル・ウエバー・カール」の著作に展開された理論生物学の業績
		奨励賞	大久保 公策	阪大・医(細胞生体工学)	助手	ヒトの各臓器における遺伝子発現の総括的把握とその医学生物学的応用
第3回 1994	「ヒューマン・ インタフェース」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	広田 光一	東大・人工物工学研究セ	博士課程	触力覚を利用した仮想空間インタフェースの研究
第4回 1995	「リズムとゆらぎ」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	山本 義春	東大大学院教育研究科	講師	生体ゆらぎの非線形時系列解析
第5回 1996	「類人猿にみる人間」	大賞	伊谷 純一郎	神戸学院大(人文学)	教授	京大アフリカ類人猿学術調査、野生チンパンジーの社会構造と サバンナへの適応についての学術調査、他
		特別賞	松沢 哲郎	京大霊長類研究所	教授	チンパンジーから見た人間-知性の比較認知科学的研究-
		奨励賞	該当者なし	—	—	—
第6回 1997	「疲労と疲労」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	該当者なし	—	—	—
第7回 1998	「脳機能の画像」	大賞	小川 誠二	Bell Laboratories, Lucent Technologies	特別研究員	磁気共鳴法による脳機能画像化を可能にするBOLD効果 * Blood oxygenation level dependant (BOLD) contrast法 による脳機能情報の画像化(検出) * fMRIによる脳内ヘモグロビンの時空間的変化の解析
		奨励賞	牧 教 山下 優一	(株)日立製作所 中央研究所	研究員	近赤外光によるヒト高次脳機能の無侵襲イメージング法の創出
		大賞	青木 淳一	横浜国立大・ 環境科学研究センター	教授	ササガダニ類の分類学的研究
第8回 1999	「動物の系統と分類」	大賞	塚越 哲	静岡大・理 (生物地球環境科学)	助教授	貝形虫類の自然科学的研究
		大賞	大橋 力	千葉工業大・工 (情報ネットワーク)	教授	情報環境学の体系化、メディア情報環境と脳との適合性の研究
第9回 2000	「21世紀のメディア エコロジー」	大賞	坂元 章	お茶大大学院 (人間文化研究)	助教授	テレビゲーム、インターネット、ロボットなどの相互作用メディアの使用が 人間の心理的および社会的発達に及ぼす影響
		大賞	清水 博	金沢工業大・場の研究所	所長・ 教授	生命と場に関する研究
第10回 2001	「セルフの人間科学」	大賞	清水 博	金沢工業大・場の研究所	所長・ 教授	生命と場に関する研究
		奨励賞	杉浦 元亮	東北大・未来科学技術 共同研究セ	リサーチ アシスタント	脳イメージングを用いたヒト脳機能と自己表象及び個性の関係に関する研究

スライド 16 中山賞等の受賞者一覧 (No.1 ~ 10)

スライド 16, 17 に受賞者一覧を掲げます。第 7 回「脳機能の画像」では小川誠二先生がもらわれて、この方も後の 2003 年に「日本国際賞」を受賞(国際科学技術財団)されたと思います。ですから、我々中山財団はいい人を選んでいくことには間違いがないと私は思っております。

	テーマ	賞	受賞者名	所属	職名	応募テーマ(研究課題)
第11回 2002	「胎児・新生児の ヒューマンサイエンス」	大賞	中野 仁雄	九州大大学院・医 (生体調節生理学)	教授	ヒト胎児の睡眠覚醒に関する行動学的研究
		奨励賞	多賀 巖太郎	東大大学院(教育学)	講師	乳児の運動と知覚の初期発達に関する行動解析と脳機能計測
第12回 2003	「手と指」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	森友 寿夫	阪大・医(器管制御外科学 整形外科)	助手	手関節における3次元アニメーションを用いた動態解析システムの開発
第13回 2004	「学びと遊び -人間から機械まで」	大賞	応募者なし	—	—	—
		奨励賞	明和(山越)政子	滋賀県立大 (人間文化学)	講師	チンパンジーの遊びと学びにみる「教育」の進化史的基盤
第14回 2005	「脳と身体性の 人間科学」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	重谷 安代	National Institute for Medical Research Division of Developmental Neurobiology (イギリス・ロンドン)	研究員	頭部三叉神経領域を考える「眼と三叉神経」の形成
第15回 2006	「自然災害の ヒューマンサイエンス」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	応募者なし	—	—	—
第16回 2007	「エビジェネティクス」	大賞	該当者なし	—	—	—
		奨励賞	南谷 泰仁	東大大学院・医 (血液・腫瘍内科)	助教	全ゲノムの網羅的なDNAメチル化の解析
第17回 2008	「情動の科学」	大賞	下條 信輔	カリフォルニア工科大	教授	* 選択意思決定の神経/行動メカニズム (推薦者: 五味裕章/電子情報通信学会ニューロンコンピューティング研究会委員長 & 日本電信電話系コミュニケーション科学基礎研究所) * 情動的判断への心理物理学および認知神経科学からのアプローチ (推薦者: 外村佳伸/NTTコミュニケーション科学基礎研究所)
		奨励賞	田中 沙織	(株)国際電気通信基礎技術研 究所(ATR)脳情報研究所	連携 研究員	* 時間遅れを伴う報酬に基づく意思決定の脳機構の解明 (推薦者: 川人光男/英国電気通信基礎技術研究所(ATR) 脳情報研究所所長&ATRトロイ) * 時間遅れを伴う報酬に基づく意思決定の脳機構 (推薦者: 石川真澄/九州工業大学大学院生命体工学研究科 教授&日本神経科学学会会長)
第18回 2009	「言語の生物科学」	大賞	岡ノ谷 一夫	(独)理化学研究所 脳科学総合研究セ	チーム リーダー	言語起源の生物学的研究プログラムの提案と実践 →言語起源の前提仮説および相互分業化仮説を中心として
		奨励賞	保前 文高	首都大学東京 (人間科学・言語科学)	助教	乳児の音声知に関する発達脳科学研究
第19回 2010	「森林の人間科学」	大賞	安田 喜憲	人間文化研究機構 国際日本文化研究セ	教授 (前副所長)	森林の人間諸科学を統合する「文明の環境史観」
		奨励賞	該当者なし	—	—	—

*所属・職名は受賞当時のものです。

スライド 17 中山賞等の受賞者一覧 (No.11 ~ 19)

「森林の人間科学」では京都大学の安田喜憲先生がもらっておりますが、最近森林の問題もいろいろと科学的に見るような人間との結びつきについて新しい考え方が出ている時代でございますから、そういった意味では非常にこういう中山科学振興財団の果たす役割は大きいと思っております。

褒賞・助成

中山賞 大賞	11名
中山賞 奨励賞	16名
中山賞 特別賞	1名
研究助成	93名
国際交流助成	
海外渡航助成	78名
海外研究者受入助成	10名

(1992~2010年度実績)

スライド 18 中山賞の実績まとめ

これらをまとめますと、**スライド 18** のようになります。中山賞大賞が 11 名、奨励賞が 16 名、特別賞が 1 名。この特別賞は、伊谷純一郎先生の「類人猿にみる人間」のときに松沢哲郎先生を外すわけにはいかないという話が選考委員会で出て、それでは例外的に特別賞をつくって、松沢先生に差し上げようということで、この特別賞があるわけです。研究助成は、ここにありますがように 93 名ですね。国際交流助成は海外渡航 78 名、海外研究者の受け入れ 10 名。そういうようなことをやって参りました。

中山科学振興財団は
これからの21世紀に、
人間の科学を介して
何をすべきか。

スライド 19 中山科学振興財団の今後の方向性

そろそろまとめに入りたいと思います。中山科学振興財団は、これからの 21 世紀に向けて人間の科学を介して何をすべきかということを考えてみたい（**スライド 19**）と思っていましたら、もう既に 1985 年の 3 月の筑波万博に関連して、「ヒューマンサイエンスシンポジウム」というのを開いているわけです。

ヒューマンサイエンス シンポジウム 進歩から幸福へ

- 第1部 現代人は何を
得、何を失っているか
- 第2部 科学技術の光と影
－ 進歩と幸福のはざままで
- 第3部 いま、なぜヒューマン
サイエンスなのか

日時 1985年3月3日
会場 日比谷プレスセンターホール

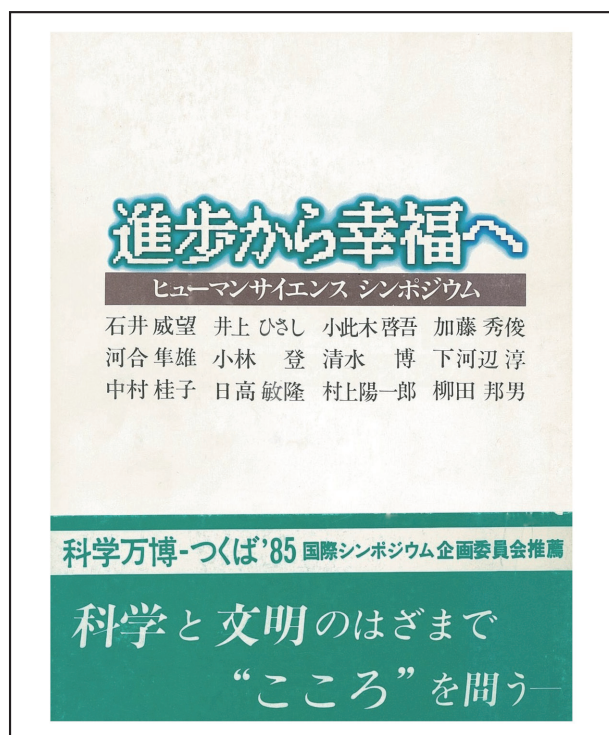
スライド 20 ヒューマンサイエンスシンポジウムの開催

スライド 20 にありますように、「ヒューマンサイエンスシンポジウム 進歩から幸福へ」、第1部は「現代人は何を
得、何を失っているか」、第2部は「科学技術の光と影－進歩と幸福のはざままで」、第3部は「いま、なぜヒューマ
ンサイエンスなのか」ということを1985年の3月3日に日比谷のプレスセンターホールでいたしました



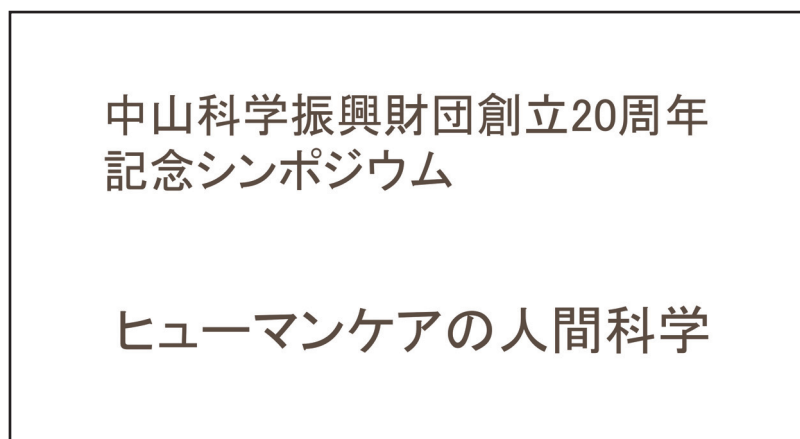
スライド 21 「進歩から幸福へ」の表紙

スライド 21 にありますように、当時の石井威望（上段左端）先生ですね。それから村上陽一郎（下段右から2
人目）先生も、皆若い顔をしておりますが、こういう人たちと、亡くなられている方もいらっしゃいます。河合隼雄
先生も、井上ひさしさんも亡くなられてしまいましたが、そういう方たちと激論を交わして、大変有意義なシンポジ
ウムをやったと思います。



スライド 22 『進歩から幸福へ』(表紙)

その記録は『進歩から幸福へ』として、中山書店から本が出版されました。読み直してみたのですが、大変内容の豊かな本だと思います (スライド 22)。



スライド 23 財団 20 周年記念シンポジウム

最後になりますが、今年は当財団創立 20 周年記念ということで、「ヒューマンケアの人間科学—高齢者のヒューマンケアを考える」をとり上げました。やはりこれを一度考えておかなければいけないと考えたわけです。私は大変意味のあるシンポジウムであったと思います (スライド 23)。



スライド 24 財団の活動報告書

毎年やった事業活動の報告書は、年刊版として出しておりますので、これからもぜひご希望の方は事務局に連絡していただければ、手配すると思います。バックナンバーでもご希望のものがございましたら、事務局に申し出ていただければとかなるかと思います。2011年からの活動報告はHP上で公開する予定です。

この20年間にわたり、皆さん方の御指導と御支援でやってきたことを私の感想を含めて、中山科学振興財団をつくられた中山三郎平氏がどうのことを考えてきたか、そしてどうのことをやったかということをお願いして、このささやかなスピーチを中山三郎平氏にお祝いの気持ちとともに捧げたいと思います。中山三郎平氏の後、15年間務めてさせていただきましたが、この機会に私も理事長をバトンタッチしたいと思います。現在、副理事長をお願いしている村上陽一郎先生をお願いすることになっています。引き続き、中山科学振興財団へのご指導とご支援を何とぞよろしくお願い申し上げます。